

ジャガイモと映画

『ALWAYS 続・三丁目の夕日』

ポテトエッセイスト 浅間 和夫

2006年日本アカデミー賞ほか数多くの映画賞を総なめにした感動の大ヒット作『ALWAYS 三丁目の夕日』の続編。2007年4月の日中会談の際、温家宝首相が安倍晋三総理に、前編本映画を見たと言っていた。前編終了から4か月後の設定。東京オリンピックの開催が決定し、東京タワーも完成し、日本では高度経済成長期が始まろうとしていた昭和34年春の東京の下町夕日町三丁目に住む人々の姿を描いたもの。

そこにはまだボロっちい下町工場の鈴木オートがあったり、駄菓子屋「茶川商店」もあった。その主人・茶川竜之介は小説家。茶川は居酒屋「やまふじ」の美人店主・石崎ヒロミから見ず知らずの子供・古行淳之介を酔った勢いで預かってしまい二人の共同生活が始まっていた。茶川は踊り子をして飛び出したヒロミを想い続け、ヒロミに恥ずかしくない自分を見せるため、芥川賞への夢に向かい執筆活動を始める決心をする。夢に向かって走り出した茶川に三丁目の人たちも応援を惜しまない。

ヒロミが茶川をあきらめ大阪に向かう途中、『純青』誌に載った茶川の小説【踊り子】のなかでヒロミへの愛情をつづったところを読んで感激し、ヒロミを探しに出た茶川の家に来た。ジャガイモ好きな貴方なら、ここで丸いもの入った「ライスカレー」をつくって茶川を待つシーンに期待されたい。

「ライスカレー」と呼ばれていたこの時代、ジャガイモとニンジンを入れるのが定番だった。近年「カレーライス」と呼ばれるようになって材料が多様化し、具が別の容器で出されたり、ジャガイモのないスープカレーも勢力を伸ばしています。

この後、果たして茶川の夢はかなうのか。そしてヒロミは帰ってくるのか？前作から続くこのお人よし過ぎる3人のドラマを軸に、登場人物もエピソードも増えて、多少の盛り込み過ぎの感もあるところををピリリと引き締める鈴木オートの長男・一平(小清水一揮)もいたりして楽しい。